

# 地域連携授業の実践とその効果

## —能動的学修での学びを構築する教育方法—

池田裕子

### ●要約

近年、一斉教授法による知識伝達という、伝統的ではあるが受動的な方法をいかにして学習者主体の能動的な方法へと転換させるのかに力点を置いた授業改革が進められている。その際のキーワードは、「アクティブラーニング」(能動的学修)である。次の学習指導要領におけるメインタームとなるこの方法について言及した論文もよく見られるようになった。しかしながら、これらの研究においても指摘されているように、「アクティブラーニング」の手法を採ったからといって、直ちに学習者がその対象を「深く学ぶ」ことにはつながらない。一斉教授法と同様に「学びの質」という問題は、この手法にも相変わらず存在するのである。

本論文では、稚内北星学園大学での筆者の取り組みをベースに、より深い学びを生起させるための一つの方法として、地域連携授業(学校間連携授業)をとりあげ、その効果を検証する。

### ●キーワード

教育方法

地域連携授業

アクティブラーニング

理論と実践の結節点

文脈横断論

深い学び

道徳教育

児童サービス論

## 1. はじめに

日本では、近代教育制度の成立時に導入した一斉教授法を基礎とする授業方法が主流であった。現在においてもこの方法は、大勢の学習者を対象とするスタンダードな教授法であることに変わりはない。しかしながら、この方法は教員のイニシヤチブが強いため、学習者が受動的になりやすいこと、個々の学習者の理解度へのきめ細かな配慮を行い難いことなどから、他の教授法との折衷的活用など、その改良が目指されてきた。戦後、高度情報化社会の到来に対する教育的対応が必要となり、その一環として、「ミニマム・エッセンシャルズ」<sup>(1)</sup>（児童・生徒に最低限教えるべき教育内容）の概念を採り入れた、いわゆる「ゆとり教育」改革が進められた。この改革は、生涯学習の観点から、学校に知識や技術の獲得のみならず、「学び方を学ぶ」場所としての機能を強めていく考え方のもとで児童・生徒の「自己教育力」<sup>(2)</sup>の育成を目指すものであった。社会がどのように変化しようとも、自ら課題を見つけ出してその解決を図りつつ、たくましく生きる人材を育成することが求められたのである。

こうした時代のニーズに即した教育理念は、当然のことながらその実践の場である授業の改革へと向かう。そこでの教員は、説明に加えてファシリテーターとしての役割の比重が高くなる。授業のなかで学習者がいかに考え、いかに動くのかという点をこれまで以上に重視するための工夫が今後の課題となろう。そしてそのことは、理論と実践との橋渡しをいかに行うかという、永年にわたる授業の課題達成に向かうためのヒントとなる。筆者は、この理論と実践の結節点になり得る取り組みとして、地域連携教育、本論文の対象としてより厳密に言えば学校間連携授業に注目するものである。その良さを一言でいえば、「相手がある」ことの重要性に尽きる。

本論文では、稚内北星学園大学教職課程及び図書館情報学課程で教員、司書、司書教諭を目指す受講生を対象とした幾つかの地域連携授業をサンプルとして、その効果と課題を抽出、分析すると同時に、これからの時代に相応しい授業についての検討を行う<sup>(3)</sup>。

## 1. アクティブラーニングへの転換

アクティブラーニングは、2012（平成24）年8月28日に発表された中央教育審議会の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」〔質的転換答申〕において、以下のように説明されている。

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺戟を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。

ここにある通り、アクティブラーニングは、大学教育における講義形式の授業に対する批判として

登場したものであった。当初はアメリカの取り組みであったものが日本にもほどなく導入されて、現在は、初等・中等教育機関にもその影響が及び、授業改革の機運が表面化している。ここで注目すべきポイントは、教員と学習者がともに授業を創りあげるとする観点が前面に押し出されていることである。そこには、現代的課題として、教員対学習者、学習者相互の望ましいコミュニケーションに重きを置く観点がある。

前述した通り、能動的な学習スタイルへの移行は既に要求されていた。その動きは1998（平成10）年に始まる学習指導要領第六次改訂における「総合的な学習の時間」の創設と「情報科」の登場、続く2003（平成15）年の学校図書館法改正による司書教諭の配置義務化によって一つの画期を迎えたのだが、このたびのアクティブラーニングへの転換提言は、これら一連の教育改革が目指していた方向性に合致した具体的な授業イメージが提示されたということになる。

しかしながら、先行研究では、アクティブラーニングは授業改革の万能薬ではなく、講義形式の授業で見られた学習者の「学びの質」の格差は、この方法によっても解決されていないとの指摘がなされており、それに加えて、フリーライダーの出現やグループワークの非活性化、思考と活動の乖離など、アクティブラーニングに関する新たな問題も提示された<sup>(4)</sup>。

こうした問題を克服しながら学生が当事者意識を持って対象を深く学ぶ機会を提供するにはどのような取り組みが必要だろうか。本論文では、筆者が2009（平成21）年度以来行ってきた地域連携授業の実践事例を取りあげて、その課題と可能性を探ることにする。この教育方法は、地域をフィールドにすることにより、教育という営みをこれまで以上に拡大する可能性を含んでいる。それは、授業が学校の外に出るということに止まらない。魅力的な授業は地域の財産になり得るという観点を加えることによって、学校、とりわけ大学が世代を超えてともに「社会を学ぶ」開かれた拠点として機能することにつながるのである。

## 2. 教職課程における地域連携授業

### (1) 「道徳教育論」から「道徳教育の研究」へ

筆者は、2009（平成21）年4月より、従来の講義形式の授業を一新し、稚内市教育委員会及び中学校との連携授業を開始した。この取り組みを実際にコーディネートしたのは、同年以降ともに授業の担当者となった平間信雄氏（現在は稚内市教育委員会教育相談アドバイザー）である。氏が初年度に示した授業のコンセプト<sup>(5)</sup>が、その後の授業実践に引き継がれることになった。

#### 【実践の柱】

- ① 学校現場の外部講師との協力
- ② 学校応援団の組織化
- ③ 共同の基盤としての『授業テーマ』の設定
- ④ 学生による道徳教材の開発
- ⑤ 学生による道徳授業の実践

稚内北星学園大学では、数学と情報の教員免許状を取得することができる。このうち、道徳を学ぶ

のは中学校数学の免許状を取得する学生である。小規模な大学であることから、履修者は一桁ということも少なくない。学生の顔と名前が完全に一致している条件下での授業は、中規模、大規模大学ではなかなかできないきめ細やかな対応を可能にする。

2013（平成25）年度よりこの科目は筆者の単独担当となり、名称も「道德教育論」から「道德教育の研究」へと変更した。前年度は8名の履修者であったが、この年度は従来で最も少ない3名であった。名称変更は、実態としては能動的な授業展開を行ってはいったものの、理論を中心とした講義形式の授業を連想させる名称であったため、より対象を能動的に研究する授業への転換を含意した。それと同時に、積み重ねた実践経験を基礎として、学習者の活動をさらに充実させることを意識した。過去に行った「道德教育論」の記録については、別に報告書があるのでそちらを参照されたい<sup>(6)</sup>。本論で提示するのは、2013（平成25）年度の道德授業の記録である。

この授業の最大の特徴は、中・大連携授業という枠組みのなかで、学生が自作資料を教材化し、それを一コマの授業として実際に中学生を対象に実施する、いわば「劇中劇」のような構成をとっていることである。研究授業に至るまでには、さまざまな課題を乗り越えなければならないが、担当者は、課題に直面した学習者を支援し、中学校との連携を円滑に進めるファシリテーターに徹した。

## （2） 授業プロセスにおける学びのコンセプト—いかにして活動の意味を伝えるか—

この授業は、3年後期の2単位設定である。従って、4年次での教育実習を予定している学習者が実際に教壇に立つ場面を想定し、自分の力でさまざまな課題を解決し、授業を行う力量を身に付けることを最大の目標としている。座学だけでは決してわからないことを、現場での実践を通して学ぶひと足早い教育実習である。扱う内容は道德ではあるが、リアルな授業の方法を体得する好適な機会であり、他の教科にも必要な能力の育成が期待される。加えてこの連携授業の特徴は、連携先との関係により教育効果を向上させていくところにある。授業というものは、ただ教員が決められた時間に教壇に立って展開するだけのものではない。そこに行き着くまでの入念な準備の重要性を実感するとともに、その一部を担うことによって、クラスの生徒らとの信頼関係を構築する暇もないうちに研究授業に臨むという学生たちの決定的な弱点を認識し、克服しようとする貴重な機会の提供でもある。

近年、徒弟制の学びを念頭に置いた「正統的周辺参加論」<sup>(7)</sup>が注目されている。これは、新参者が当該の実践的共同体の営みに参加することを通して、古参者からその知識や技能を修得していく過程を学習論として一般化したものであり、現在のOJT（On-the-Job Training）にも共通する理論である<sup>(8)</sup>。文脈を欠いた知識や技能を個々に獲得するのではなく、本物の実践を組織することで状況の文脈に埋め込まれた学びを共同的に展開しようとするこうした取り組みには、これまで学校教育のなかでは見過ごされがちであったさまざまな能力の向上が期待できる。

この理論では、その参加の状況は、継続的にある仕事の一部を担うものとして想定されているが、現場における学びのインパクトは、たとえ1時間であっても多くの予期せぬ派生を生み出し学習者に影響する。「正統的周辺参加論」は、こうした教室と現場という「複数の文脈を横断する中での学習」（文脈横断論）を代表する理論的枠組みとして、多くの実践的なヒントを提供する<sup>(9)</sup>。シラバスの要所には、想定できる範囲での学びを生起させるための「仕掛け」がなされている。この授業で心掛けることは、その「仕掛け」の意味を学生たちに気付かせるということである。

## 【資料】2013（平成25）年度「道徳教育の研究」シラバス

## 1. 授業の概要

## ■ 学習教育の目標

道徳教育について、理論と実践の両側面をふまえ、実際に教壇に立って道徳の授業を展開できる力量を身につけることを目標にする。

## ■ 授業の概要および学習上の助言

これから道徳教育を行う側として、どのような資料を使ってどのように授業を展開するのか、その方法を検討する。グループワークで道徳の授業案を作り、最終的には中学校との連携下で研究授業を行う。受講生は、授業を通じて自分なりの道徳教育についての観点を育てて欲しい。

## ■ 学習内容

- 第1回 ガイダンス 教育課程上での「道徳」の位置づけ
- 第2回 道徳とは何か
- 第3回 資料作成の方法（1）自作教材を創る—ゲストスピーカーによる授業—
- 第4回 資料作成の方法（2）教材の紹介（次週までにどのような教材にするか考える）
- 第5回 資料案の提示（ディスカッション）
- 第6回 資料の確定（提出）
- 第7回 資料決定・役割分担（潮見が丘中学校校長—稚内北星学園大学実践アドバイザー）
- 第8回 学習指導案の作り方
- 第9回 道徳授業の参観（潮見が丘中学校1年1組）
- 第10回 授業の組み立て（1）教材研究・学習指導案作成
- 第11回 授業の組み立て（2）学習指導案作成
- 第12回 研究授業リハーサル（1）改善点の提示
- 第13回 研究授業リハーサル（2）
- 第14回 研究授業の実施と協議（潮見が丘中学校）
- 第15回 研究授業の評価と指導案の改善（レポート提出）

## ■ 学習支援

稚内市潮見が丘中学校との連携下で進める。

## ■ 使用教材

毎回資料プリントを配付する。参考文献は適宜紹介する。

全15回の授業のうち、第3回、7回、9回、14回の連携部分を除いては、最初に30分から1時間の一斉授業を行う。そこでは、道徳に関する理論のほか、それぞれの回で行う活動に関する知識や技術を伝達する。最初の連携である第3回目は、学内ゲストスピーカーによる超短編小説（ナノベル）の執筆方法についての授業を行った。物語の形式に始まり、技術的なことについても話は及んだ。道徳の読みもの資料の難しさは、いかに生徒の心を惹きつけるかというところにある。クラスの実態に合った身近な題材であることに加えて1コマ50分授業のなかで使用できる適切な文字数という制限もある。

授業者が取り組みたい題材を効果的に行うための条件を勘案していくと、既存の読み物資料ではうまくいかないこともある。自作教材を使用する取り組みが見られるのもそうしたことを裏付けているのだろう<sup>(10)</sup>。

この回から学生たちによる奮闘が開始される。何しろ、全員が恐らくは初めて、それぞれ一つの物語を創るというクリエイティブな作業を行うのだ。しかも締め切りが設定されていて、「生身の」中学生たちの授業に使うともなれば嫌でも当事者意識が高まる。責任感が生まれるのである。少ない時間で何を題材として道徳を考えるために相応しいと考えるストーリーを組み立てるのか、自分の経験がベースになることもあれば、全くのフィクションになることもある、グループの話し合いも熱を帯びる。ここで作業が止まってしまう学生には、担当者が個別に支援を行う。図書館やインターネット上で公開されている資料を参考にすることも多い。この作業を通して道徳の授業に必要な題材観が鍛えられていく。部活動やアルバイトで多忙ななか、時間を捻出することは自己管理であり、現場では必須の能力となる。

こうして試行錯誤を重ねながら、どうにか第6回の授業で第一案を提出すると、担当者はそれについて連携先の校長と協議する。校長は、研究授業の対象となる1年1組の状態に最も適した資料を選んでくださる。第7回目は、校長に大学まで足を運んでいただき、資料の講評を兼ねた選定を行っていただく。その際、現場における道徳の授業の現状について担当者との対話形式の授業を行った。ここで学生は、自作資料について客観的に理解を深め、修正のポイントを把握する。

資料が決まれば、直ちに学習指導案作成に取りかかる。ここからは一気呵成に作業を進める。学習指導案の作成を通して理解を深めたタイミングで、潮見が丘中学校での実際の道徳の時間を参観する。この頃になると、学生の思考回路は教員のそれに近づこうとしているため、実際の授業を評価する際の観点を自ら提示することができる。

こうして実際の授業から得た知見を使い、選ばれた資料と学習指導案をグループのメンバー全員で練り上げていく。この段階で、必要な資料の修正を行い、完成に近づけていく。第12回目は、学生を生徒役として短縮授業を行う。この回は、連携授業開始当時から全て学内外に公開している。参観には、教職課程を履修している他学年の学生や授業のない他の教員たちが来ることが多いが、採用された資料を作成した学生が自分の中学校時代の恩師を招待したこともあった。ちなみに、不登校の女子生徒を描いた彼の作品中に出てくる教師のモデルがこの恩師だった。赤い眼をして授業を参観していたその先生の顔は今でも忘れない。模擬授業の終了後、担当者が司会となって検討会を行い、ここで課題の再確認をした後、学生と担当者の時間をつくり、課題をどのように解決するのかという話し合いをもつ。ここは、学生の不安を取り払う時間である。じっくりと向き合い、意見交換をしながら最終的なチェックを終える。

研究授業はグループ全員で行う。今回は、1グループ3人であることから、メインの授業者、板書係、資料の範読係という役割分担をした。1グループ4人の場合は、教室後方から授業者たちを写真撮影する係を増やす。フリーライダーを出さない配慮である。

研究授業に向けて、担当者は授業を行う3名に一つの課題を出した。それは、潮見が丘中学校と連絡をとり、授業までの間に校長以下教員たち、そして対象のクラスの生徒たちに挨拶（自己紹介）をし、研究授業の段取りを担任と打ち合わせすること、その内容を速やかに担当者に報告することである。

訪問の際は、スーツ着用である。これは、同時に教室や黒板のサイズを把握する機会でもある。大学の黒板と中学校の黒板はサイズが異なるため、板書のイメージを掴むのである。担任から座席表をいただくことも忘れない。これは、クラスの生徒たちとの信頼関係の薄さという「にわか教師」の弱点克服の一助となり、授業のパフォーマンスが向上することを期待しての課題である。

つまり、この授業のコンセプトは、道徳の資料作成とその教材化というクリエイティブな能力開発、グループワークによるコミュニケーション能力の向上、資料と学習指導案、ワークシート、アンケート用紙の作成と印刷、配布など、本番に向けたさまざまな準備を締め切りまでに行うという「仕事」への責任の自覚とともに、教育現場への理解と配慮、社会人としてのマナー習得を学生自身が達成することを重視するものである。相手があることによりこうした一連の活動を適度な緊張感をもって実施できることが、学校間連携授業の良いところである。但し、現場の仕事の一部を担った経験を学習者の能力向上につなげるには、前述した通り、活動の都度にその意味を理解してもらうことが必要である。「なぜそうするのか」を理解し納得することにより学びが向上すると考えるからである。

### (3) 連携による研究授業の成果

打ち合わせの段階で、他のクラスの担任の先生方から一つの提案をいただいた。それは、研究授業の時間帯に他の2クラスも同じ学生の作った資料を使用して道徳の授業を行うというものである<sup>(11)</sup>。授業は、それぞれのクラスの担任の先生が行う。学生たちの活動が現場の教員の刺激になっているというのである。学生たちにそのことを伝え、やる気に満ちた笑顔が返ってきた。資料と学習指導案については、他のクラスの先生方に事前にお渡しした。授業での感触をもとに再度の修正もあるだろう。自作資料も学習指導案も、不断の改良を重ねるものである。

#### 【資料】 僕の音読

「先生、お腹が痛いのでトイレに行ってきます」

ある日の国語の授業、出席番号順に音読する場面があったが、翼は自分の順番の前になるとそう言ってトイレに行った。次の日の国語の授業でも、音読の場面になると、前日と同じように、翼はお腹が痛いことを理由にトイレに行った。

どうして、翼はこんな行動をとったのか……。発問① なぜ翼はこんな行動をとったのだろう。

実は先週このような出来事があった。

国語の授業で翼が音読する場面があった。しかし、翼は音読が苦手であり、みんなと同じようにすらすら読むことが難しく、うまく読むことができなかった。その時、クラスではクスクスと笑うような人もいたし、翼を小馬鹿にしているような雰囲気があった。

そんな雰囲気を察した国語の先生は言った。

「なんで笑うんだ。翼は一生懸命読んだんじゃないか」

授業が終わり、国語の先生が教室を出ていくと、直ぐさま太郎たちは小声で話していた。

「翼って読むの下手だよなー。なんでスラスラ読めないんだよ」

すると、クラスメイトの何人かが太郎の言葉に便乗した。

「本当だよな」

「しっかり読めよな」

このとき翼は、何も言い返すことができなかった。(俺だって、ちゃんと読めるようになりたいよ。なんで俺だけできないんだよ……)

そんなクラスの雰囲気や友達の武史が一掃した。

「お前らそういうこと言うのやめろよ」 発問② 自分なら太郎と武史のどちらの立場だっただろう。

ある日の昼休み、翼は武史に呼ばれた。

「翼、昨日も今日も音読の時間にトイレに行ったよなー？ なにかあったのか？」

武史は、最近の翼の授業での行動を不思議に思い、呼び出したのだ。

すると翼は、何も言わずにうつむいた。

「もしかして……、先週の授業でのことだったりするのか？」

武史の問いかけに対し、翼は心の中にあっただもやもやを解き放つように、少しずつ自分の言葉で話した。

「俺、みんなみたいにスラスラ読めないし、みんなに馬鹿にされるのが嫌なんだよ……。先週の授業の後にはみんなから『下手だなー』とかも言われたし……。もうみんなの前では読みたくない」

武史は翼の気持ちを受け止め、話し始めた。

「そうかあ。確かに翼は周りの人と比べると、苦手な方かもしれないよな。でも、苦手なら苦手なりに頑張って読めばいいと思うけどなあ。練習すればうまくなることもできる。最初から上手な人もいるかもしれないけど、そうじゃない人もいるんだよ」

翼は何も言わずうなずいた。

この日の夜から、翼は音読の練習を始めた。何回も何回も読む練習を繰り返した。やはり、つまづくことはありながらも、最初よりは明らかに上手になっていることも実感した。自分なりのコツもつかめてきたようだった。

そして2日後の国語の授業。

この日もいつものように音読の場面があったが、この日の翼は逃げなかった。

翼は、何度も間違え、何度もつまづきながらも堂々と読むことができたのだが、クラスのみんなにクスクスと笑われ、また馬鹿にされてしまった。

すると、武史が勇気を振り絞ってこう言った。

「なんで笑うんだよ!! 翼は苦手なりに頑張って読んだじゃないか。だから、その頑張りを見てやれよ」

武史は続けて言った。

「おい、翼も黙ってないでなんか言えよ。」

少しの間があってから翼は答えた。

「実は、この前みんなに馬鹿にされたことがすごく悔しくて、あの日の夜からたくさん読む練習したんだよ。そのおかげで、少しは上手に読めるようになった気がする。まだみんなよりは下手かもしれないけど、みんなと比べないで欲しいんだ」

発問③ 最後の翼の言葉に対し、自分なりに語りかけてみよう

登場人物の設定を始めとする課題は幾つか残されていたものの、決められた時間の中での到着である。

作者である学生がこの資料で伝えたかったこととしてあげていることは、「苦手なことでも努力する姿勢の大切さ」や、「自分ひとりでなく友達の手も借りながら成長していく」こと、「最近の中高生はネガティブ思考の子や自己肯定感の低い子が目立つので、自分の悪いところばかりみず、良いところにも気付いて欲しい」こと、そして「他人の悪いところばかりでなく、他人の良いところにも気付いてあげられるようになって欲しい」ことであった。学習指導要領では、「1 自分自身に関すること」のなかの「(2) より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ」あるいは、「2 他人との関わりに関すること」のなかの「(2) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ」に近い。

クラスの人数は27名である。導入は、前提の発問「自分ひとりではできなかったが、他人の力を借りてできるようになったことを書いてみよう」に始まり、12分かけた。展開は27分とった。資料を3つの段落に分け、それぞれ発問を投げかける。学級訪問効果のほかに、担任の先生の配慮もあったと推察するが、生徒たちは授業に真剣に取り組み、活発な発言が続いて授業はスムーズに進んだ。学生たちも、初めてにしては堂々とした態度で懸命に生徒たちと向き合おうとする良い授業だった。課題としては、授業者に経験がないためやむを得ないことではあるが、時間配分が難しく、生徒の活動のための時間を設けることが不十分だったため、生徒を中心にした授業というところまでは行きつけなかったこと、生徒の発言をどのように扱って展開していくかのイメージを作ることが難しかったことから、対応にやや苦慮した場面があったことである。最後の段階でメインの授業者が「ねらい」の部分をもとめて生徒たちに提示したことで、何となく収まりはついた印象であったが、これを生徒たちの発言から構成できるようになれば良いだろう。

6時間目、緊張の50分が終了した放課後、校長、教頭、教務主任の先生と1年生の担任の先生全員が検討会に出席して下さった。1年生の他のクラスの先生方から、「大変反応が良かった」という言葉をいただいた。資料が中学校1年生の発達段階に適していたというご指摘である。他の2クラスの先生方は、わたしたちよりも導入に時間をかけたようである。ここで幾つかの指摘がなされた。いずれも現場を熟知した専門家としてのアドバイスである。この時間が、この授業の重要な学びの一つを構成する。学生たちは、メモを取って真剣に話を聴く。先生方は、気づいたことを指摘するだけではなく、それをどう改善したら良いかということをしっかり伝えようとする姿勢が強いため、非常に有効な議論になった。

それでは、実際に授業を受けた生徒たちの反応はどうだったのか。

以下は、授業に関するアンケートの集計結果である。授業の様子を反映して高い評価をした生徒が多かった。記述の部分では、「楽しかった」という回答が圧倒的であったが、内容を見ていくと、「先生の指示や説明はわかりやすかった」という項目において、3以下と評価した生徒が19%、「授業の内容について興味を持つことができた」という項目では3以下が15%いることに気付く。総合評価と併せて考えると、説明や授業の内容自体についてよりも、学生による授業の新鮮さとクラスのやりとりの楽しさで総合評価が高く出た可能性は否定できない。それでも、ワークシートに書かれていた生徒の意見として、「なぜ翼がすらすら読めないのか原因を探る。かつぜつや表現力のせい？」という解決方法の提示、「これから起こるかも知れないことを話し合えてよかった。やっぱり友達って大事だなあとと思った」、「今日の内容は1年1組でも起こってもおかしくない事だから。もしこんな事が、これからおきたらほげましていく」というように、授業を実生活に結びつけて考えた生徒がいたことは、実際に授業をした学生たちにとって何よりの励ましであった。

表1. 授業に関するアンケート結果

質問と評価	5	4	3	2	1
先生の指示や説明はわかりやすかった	63%	18%	15%	4%	0%
授業に対して意欲的に取り組むことができた	56	33	11	0	0
授業の内容は理解することができた	74	22	4	0	0
授業のテーマ・内容に興味を持つことができた	52	33	7	4	4
授業を総合的に判断して満足している	48	41	11	0	0

そのほかの記述では、(先生からの)「質問があった時はきんちょうしたが、自分の意見を伝えられた」「問題に取り組む時間が少なく、しかもいきなり当てられるから困った。でも自分の意見が言えて良かった」と回答した生徒がいた。これについては、後の検討会でも話題となり、「そのような時のために、授業の最初に一言断っておくと生徒の心の準備が整って良いのではないか」というアドバイスをいただいた。学生は、「自分の意見」を言うということが勇気のいることだという指摘に、「はっとした」との感想を述べていた。

#### (4) 評価

研究授業は、学生にとっては、生徒としての経験を思い出しながら、授業者としての視点を育てていく貴重な機会である。授業を通して現場を一部経験しながら自己の学びを高めていくプロセスのなかで、担当者が学生とどのように関わるのかは重要である。個別指導、一斉指導、集団学習を場面によって適切に使いこなし、学生のスキルを確実に上げていくにはどうすれば良いのか。さらに、教職課程の場合、当然ながら専門的な職業教育という側面が強くなるため、本気で教員を目指す学生と、さしあたり免許状の取得を目的とする学生とでは、そのモチベーションに差が現れる。前者にとってこうした実践的な授業は願ってもない絶好の機会となるが、後者にとってはかなりの負担感を伴うことになるのも事実である。今回の授業評価アンケートでは、少人数ということもあり、心構え作りには成功したのだが、後者の学習意欲をどのように高めるのか、これは、今後も継続して考えなければ

ならないことである。そして、理論と実践を結ぼうとするならば、道徳哲学的な側面を実践のなかで理解していくことが果たして可能なのかという問題がある。これについては、今回は達成できなかったが、読み物資料の作成段階で掘り下げることの可能性を指摘しておく。

#### 【資料】授業評価アンケートから

- これからもこの形態で授業を潮中にやらせてもらうべき。この経験はすごく良い経験になると思うので継続するべきだと思う。個別指導はすごく丁寧だった。
- かなりハードルの高い内容だった。本気で教師を目指すならば最高の経験になるだろう。指導は非常に適切だった。また、周りの学生との連携が上手くいって、とてもやりやすかった。

学生による授業評価アンケートの結果（総平均値）は、4.8という高い数値だった。特に、「授業の内容に興味を持ち、より深く学びたいと思った」という箇所は、受講生3名全員が5をつけた。道徳の授業についての知識伝達に終始する一斉授業形式を必要最小限に止め、学生を主体として教師がサポートする能動的学習の割合を増やし、そのなかで「実際の現場」を一部ではあれ採り入れた授業は、学生たちが満足するものであったことがわかる。

それに加えてこの授業では、筆者が想定していた以上の影響があった。筆者は、当初は学生への影響のみを意識していたのだが、中学校の先生方に大きな刺激があったということ、授業が進むにつれ、中学校の先生方が積極的に提案をしてくださったことは非常に嬉しい出来事だった。多忙な毎日の業務のなかで、協力してくださった中学校側には感謝の言葉しかない。

そして何よりも、担当者である筆者自身にも大きな影響があった。授業のなか、それぞれの活動の意味を掘り下げていく過程で、細部にわたる手配、準備の全てを効果的な学びへと結びつけようとする意識が高まった。授業から得られる気付きは終わりが無いものだという事を担当者自身も改めて実感する経験となった。

### 3. 図書館情報学課程における地域連携授業

#### (1) 「児童サービス論」の概要

この科目は、司書及び司書教諭の資格を取得するための必修科目である。職業に関する資格を授与するための授業であるため、前述の教職課程同様、現場を経験する活動を採用入れることに重きを置いた。2年前期2単位の設定である。

最初の開講は2011（平成23）年であったが、この時は複数教員の担当であったことに加えて何名かの3-4年生が受講していたということもあって、比較的難しいプロジェクト型授業-学生による絵本「読み聞かせ」イベントの企画、運営-と小・大連携授業を行った。稚内市立稚内港小学校の1年生と6年生に絵本を使った授業を試みた。2013（平成25）年度からは、筆者の1名担当となったこともあり、近隣の富岡幼稚園との連携を開始した。学生たちが富岡幼稚園に出向いて幼稚園教諭による「読み聞かせ」を見学して、気づいたことについてのレポートを提出する方法をとった。前進と後退の繰り返しを経て、2015（平成27）年からは、大谷幼稚園との連携授業のなかで、学生が園児に向けて「読み聞かせ」を行うこととした。担当者である筆者の「読み聞かせ」の力量向上と、現代的な課題を踏

まえつつ、毎年少しずつの改良を加えてきたわけであるが、それらの蓄積の集大成として、アクティブラーニングの手法を多く取り入れる授業づくりを行った。教職課程の科目同様、少人数の受講者による授業のため、細かな指導のしやすいことが特徴である。

## (2) 授業プロセスにおける学びのコンセプト—対象を深く理解する—

「児童サービス論」は、子どもの読書を支援するためのあらゆる方法を考察する授業である。近年、国民の「活字離れ」が進んだとの危機意識から、子どもの読書への関心が高まり、将来の図書館利用者を育成するという極めて重要な課題解決の方法として幼児期から学童期を通しての子どもの読書が重視されている。従って、受講者に求められるのは、「子ども」の発達に対する深い洞察と読書の効用についての理解である。

一斉教授法の場面では、教員が一方的に話すスタイルを極力避け、対話形式をとることを心がけた。アクティブな場面では、受講生の経験を最大限に活用することにした。経験の教材化である。この資格を取得しようとする学生は、ほとんどが読書好きである。そのため、彼らには独自の読書歴がある。自身の経験から導き出された解答は、定着しやすいだろう。

このことは、ある種の自己開示にもつながる取り組みであることから、学生の「心構え」を作ることが重要となる。アクティブラーニングという方法のなかで自分語りをすることでどのような効果を期待しているかということについて、時間をかけて理解してもらう。そのため、授業全体の見取り図を示すシラバスは、他の科目と異なる形式にして、授業途中の区切りで配布した。自分の読書経験を振り返り、受講者全員で共有するという学びを経験することが心構えをつくることにつながるという意図である。

今年度の受講者は10名、適切な人数である。

それでは、第一日目の授業を紹介しよう。授業に入る前の段階で、各受講生に対して以下のような「事前課題」を出した。

### 【資料】児童サービス論事前課題

あなたが小学校卒業までに読んだ本のなかで、最も印象に残っている作品を1冊あげ、以下の1～8の情報を入れて作成してください。字数はA4版1枚程度とします。

1. 本のタイトル
2. 作者
3. 初版発行年（外国の作品の場合は、その国での初版発行年）
4. 本が出版された当時の時代背景の説明を少し
5. 簡単なあらすじ
6. 読んだ年齢
7. どんなところが印象に残ったのか
8. 今考えてみると、自分にどんな影響があったと思うか

記述内容を指定することで、他の受講生との比較が容易になり、質問がしやすくなる効果を期待している。この「事前課題」を最初の授業で受講者全員が発表する。聞き手には、7番と8番の箇所に注意を払い、メモを取るように指示した。好きな本を語る時の受講生一人ひとりの話を聞くことにより、その受講生がどんな人物なのかを掴むことができる。教員の読書歴についても聴いてもらう。この二つのことが同時に働いた時、10名の受講生+教員の間が存在した最初の緊張が解きほぐされ、クラスがより「安心して話のできる場」に変化する。アイスブレイクである。この雰囲気最初に作っておくのは、アクティブラーニングを行ううえで極めて重要な手続きである。

個々の発表の後は、フリートーキングの形で補足や質問をしてもらい、全員が話し終えた段階でグループワークに入る。少人数に分かれて（今回は3・3・4）、それぞれの発表を振り返り、その中から幼少期の読書の効用について書き出してもらい、受講生は、グループワークの中から自らの経験を相対化することを求められる。この「経験の相対化」がアクティブラーニングの鍵を握る。教科書に書いてあることを暗記するのではなく、自分の経験を使って解答を導くのである。

この方式の授業は、一斉授業の時よりも細かい段取りの配慮が必要である。どの場面で、何をどう提示すれば高い教育効果が得られるのかを常に考えながら準備を進めなければならない。そして、なぜ、この場面でこの作業を行うのかという意図とねらいを丁寧に伝えることが必要である。そうしなければ、受講生は、漫然と時間を過ごすことになりかねない。それらが良好に働いた時、一斉授業では得られない豊かなコミュニケーションを通して教員と学生、学生同士の直接的な感化、影響が活きる授業になるのである。

シラバスは、グループワークの段階で提示し、学習の目標を確認する。読書の機能が大きく分けて2種類あることを体験を通して理解する。

## 【資料】2015（平成27）年度「児童サービス論」シラバス

### 【全体の目標】

子ども時代の読書は、豊かな人間性を育むことにつながる。読書は感性や情操、思いやりなどといった、かけがえのない心のはたらきを育てる。そしてもうひとつの重要な役割は、社会的自立の基礎となる公共的な教養を獲得するための基礎をつくることである。そこには情報リテラシーも含まれる。

この授業では、自分の読書経験をベースに、子どもの読書がどのような可能性を有しているのかを理解する。そのうえで、それぞれの発達段階において子どもと本とを結びつけるにはどのような工夫があるのかを考える。

### 第I部 イン트로ダクションー「読書」はなにをもたらすのかー

【目標】 幼児期における読書の効用について、自他の経験から学ぶ。

- (1) グループワークを通してより高度な到達を目指す。
- (2) コミュニケーション能力を向上させる。

01 ガイダンス・「事前課題」の発表

02 「事前課題」の発表

03 グループに分かれて意見交換（「本日の課題」提出）

**【課題1】**

子どもの読書にはどのような効用があるのかをまとめましょう。

**第Ⅱ部 歴史的背景から児童サービスの過去を知り、今を知る**

**【目標】**「児童」とはなにかを理解する。

- (1) 児童書の歴史についての知見を得る。
- (2) その知見をもとに前近代と近代の子ども観の変化を構造的に理解する。

04 欧州における「子ども」の誕生と「絵本」

05 近世日本の子どもの本

06 近代日本の子どもの本

**【課題2】**

明治から大正にかけて、日本の子ども像はどのように変化しましたか？

**【目標】**「児童サービス」とはなにかを理解する。

- (1) 戦中と戦後（現代）の子ども観を確認する。
- (2) いまに合った児童サービスの内容を考える（学校と公共図書館の連携含む）。

07 現代日本の子どもの本

08 児童サービスという仕事①子どもの社会的発達と読書

09 児童サービスという仕事②今の子どもにはどのようなサービスが必要か

**【課題3】**

これからの児童サービスにはどのようなアイデアが必要でしょうか。思いつくものをあげ、その理由を説明してください。

**第Ⅲ部 「読み聞かせ」演習**

**【目標】**子どもの読書を支援する。

- (1) 「読み聞かせ」の効用について脳科学の側面から理解する。
- (2) 「読み聞かせ」の技術を習得する。

10 「読み聞かせ」の効用

11 「読み聞かせ」の基本

12 「読み聞かせ」演習

**【目標】**子どもの読書を支援する。

- (1) 自分の個性を活かした「読み聞かせ」を創る。
- (2) 自信をもって「読み聞かせ」をする。

13 「読み聞かせ」リハーサル

14 「読み聞かせ」発表会（大谷幼稚園との連携授業）

15 振り返り、課題4の作成と提出

**【課題4】**

あなたはこの授業を通して何を得ましたか？この授業の感想も書いてください。

第Ⅱ部では、児童書の歴史をたどることで「子ども観」の変遷を知り、「子どもとはなにか」に迫る。ここでもグループワークを通して議論しながら進めていく。

第Ⅲ部は、「児童サービス」の要ともなる「読み聞かせ」実演である。子どもたち相手であるため、反応はシビアな筈である。子ども相手にごまかしはきかない。つまらなければ「読み聞かせ発表会」は崩壊するかも知れないのだ。ここで担当者は、受講生一人一人に「読み聞かせ」の技術指導を行う。この箇所は、今年から始めた取り組みである。事前準備から始まり、読み方の技術、ページのめくり方、持ち方など、「読み聞かせ」の奥深さを学ぶ。その後、一人ずつ、実際に皆の前でリハーサルを行い、全員でより良くするための意見や感想を述べ合う。ここがこの授業の重要なところである。教員と学生が一体となって「発表会」の成功に向けて取り組むのである。

### (3) 連携による成果—園児の前で読み聞かせ—

集中講義の最終日、受講生たちは、実際に園児たちに読み聞かせを行うという最終課題に取り組んだ。事前の打ち合わせで「読み聞かせ」メニューを渡して、ご協力いただく稚内大谷幼稚園の施設長に園児の人数とそれぞれの様子を伺った。

当日は、前日の発表会で指摘された箇所の修正が為されているかどうかを意識してもらいながら最終的なチェックを行った。この短い間にほとんどの受講生の技術が向上していた。印象的だったことは、一人ひとりの発表を見聞きすることによって、それぞれの個性がよく判るということである。技術の習得に優れた受講生、際だった表現力を持つ受講生、上手くはないがどことなく印象に残る受講生など、一斉教授法では決して見えない受講生の個性や人柄が伝わってくるため、その良さを伸ばすような指導を意識した。少人数で行うアクティブラーニング型授業は、教員と受講生とが直接感化し合う。それだけに、指導側の影響力が強くなるためより多くの配慮が求められるし、責任もより大きくなる。

園児の集中力は、短時間で切れることを想定して、適宜休憩を入れながらプログラムを進めることとした。受講生には、最初に簡単な自己紹介をしてもらい、子どもたちと短い対話を経た後に、持参した絵本を読み聞かせることにした。プログラムの順序は、2日前に皆で話し合っただけで決めた。最初に子どもなら誰もが知っているようなメジャーなものを置き、長いもの、短いものを考えながら配置した。適切かどうかは当日にならないと判らない。あれこれ考えながら決めることもよい練習である。

#### 【資料】「えほんのよみきかせメニュー」

##### ①グループ

エリック・カール	はらぺこあおむし
つつい よりこ	おでかけのまえに
きじま せいご	シロクマゆうびんきょく
クリス・ホートン	ちょっとだけまいご

##### ②グループ

たにかわ しゅんたろう	これはのみのぴこ
ウテ・クラウド	サンタクロースがすねちゃった

③グループ

キヨノ サチコ	ノントンぶらんこのせて
かがくい ひろし	がまんのケーキ
ちょう しんた	たぬきのじどうしゃ

当日、来てくれた園児は年長さん（5歳）8名だった。最後までつきあってくれるかどうか、皆不安だった。当日まで、何歳の園児が来てくれるのかわからなかったことと、受講生の好きだった絵本を読むという設定にしたので、園児の発達段階への配慮は二の次になってしまったが、そのことが、却って読み聞かせの本質であるコミュニケーションについて受講生が理解する良い材料となった。受講生には、読み手ではなく、園児の様子を良く観察することと、振り返りの際に気づいたことを述べるように指示しておいた。

以下は、「読み聞かせ」の実際である。

- 1) 読み手が絵本のタイトルを話して表紙をめくった瞬間に「面白い」と声を出す園児が複数名いた。
- 2) 同じように、読み手が絵本の表紙をめくった瞬間に「面白くない」と声を出す園児が1名いた。

これは、その絵本を過去に読んでもらった経験の有無ではないか、園児がまだ読んでいないのに「面白い」と言った絵本は有名なものであり、「面白くない」と言った絵本は、新しく知名度が低い作品である。

- 3) 園児の集中力が素晴らしい。

前述した通り、園児の集中力は、もって15分と想定していた。ところが、彼らは、第①グループ、第②グループを持ちこたえた。特に、第②グループの2つの作品は、長く、内容も5歳児には難しい。しかしながら、『これはのみのぴこ』は、言葉遊びのリズムを活かした読みで、園児らの復唱を呼び込むように進めたため、飽きが来なかった。『サンタクロースがすねちゃった』も長く、全く5歳児には内容の理解が不可能と思われる絵本であったが、子どもたちは時に寝転がるなどして姿勢を変化させながらも、最後まで聞いていた。子どもによっては、読み手の顔を凝視したり、読み手の言葉をオウム返ししたりして、意味がわからないにも拘わらず楽しそうに聞いていたのである。

松岡亨子氏の『えほんのせかい こどものせかい』（日本エディターズスクール出版部、1987年）のなかに、「機械ならぬ人が本を読むと、そこからよいものが流れ込む」という記述があるが、その場面が鮮やかに現れたようである。

- 4) 好きな絵本が終わると「短い」と言う子どもがいる。

子どもたちの発達段階によって、絵本は読み手とのコミュニケーションの楽しみを強く感じる段階から、お話の楽しみを強く感じる段階へと移行するのではないか。他の年齢の子どもたちの様子も観察してみたい。



読み聞かせ発表会

この授業では、理論と実践の架橋をあらゆる場面で達成できるよう留意した。特に第Ⅱ部「歴史的背景から児童サービスの過去を知り、今を知る」で学んだ読み聞かせの本質、即ち、「読み聞かせ」とは、絵本と読み手のコミュニケーションに加えて子どもと読み手のコミュニケーションという二つのコミュニケーションで成立する活動であることを、体感することができた。<sup>(12)</sup>

#### (4) 評価

「読み聞かせ発表会」は、学生たちにとって、児童とのコミュニケーションを図り、且つ自分自身を表現する機会である。学生たちが授業を通して現場を一部経験しながら自己の学びを高めていく過程で、担当者の支援の在り方が問われる。個別指導の際には「読み聞かせ」の技術指導を行い、一斉指導では児童書の歴史から「子ども観」の変遷をたどり「子ども」への理解を深める手助けをする。集団学習ではグループのなかで学生相互の意見交換を活性化させる。これらの活動を通して、学生のスキルを伸ばしていく。さらに、図書館情報学課程の場合、専門的な職業教育という側面はあるが、本好きの延長としての資格取得希望者が多い。従って、教職課程のように本気でその職業に就くことを目指す学生と、さしあたり資格の取得を目的とする学生との大きな差異は表れにくい。それだけに、受講のためのモチベーションを全体的に高める工夫が必須となる。「児童サービス論」の場合、「子ども」を理解するという科目の性格が「子育てのために役立つ知識」の習得につながる。こうした見方を提示することで学生の興味関心が高まりやすい。

以下は、学生の感想文である。

#### 【資料】学生の感想文（抜粋）

(1) 私はこの授業で本を伝える大切さについて学んだ。

実際に、大学生に読むのと、子どもたちの前で本を読むのでは、状況が違い、緊張もありましたが、子どもたちも落ち着いて聞いてくれて楽しかったと言ってくれたことが何より嬉しかった。

- (2) 授業を通して、絵本、読み聞かせ、読書という子どもの頃何げなくあったものや行動が、今となってここまで深いものだとは思いませんでした。今日の子どもたちを見てわかりましたが、読み聞かせはコミュニケーション方法の一つだと思いました。
- (3) 私は、この授業で本のすごさというものを実感した。幼い時期の読書が今に影響があるなど考えたこともなく、とても驚いた。実際子どもを相手に本を読んでもみると、とても楽しく子どもにも楽しんでもらえるように感じる。大学生の前で読むのとは違い、コミュニケーションの場面が多く少しとまどったが、しっかり対応できたように思える。
- (4) 子どもに絵本を読み聞かせることは、初めての体験であり、練習しているときはどうなるかと思ったが、子どもたちが思いの外反応してくれて嬉しかった。子どもとのコミュニケーションから学ぶことがたくさんあった。
- (5) あっという間の5日間だった。読み聞かせの部分が一番印象に残りました。子どもの集中力はそんなに長くないと思い、短めの本を選びました。しかし、実際は予想とは違い、最後まで集中している子どもや、「短い」と言ってくれる子どもが居たので驚きました。
- (6) ブックトークや読み聞かせの効用などを学んで、読み聞かせの練習をした時は、緊張しましたが、うまくできていたと自分で思えたので、それは授業の成果だと思います。実際に読み聞かせをした時は緊張して、うまくコミュニケーションをとることができなかつたと反省したのですが、読み終えた時、子どもたちが楽しかったと言ってくれたので、少しでも通じたものがあったのだと思い、嬉しかったです。
- (7) 私も小さい時に読んでもらっていた絵本が、実は子どもの成長に欠かせないものだと知った。歴史もあり、戦争中と今では本の役割も違っていて、子ども時代に出会う本によって人格に影響があると思うと恐ろしさを感じた。
- (8) 司書という仕事を通してその中にある児童サービスについて深く学べただけではなく、児童そのものとの接し方を考えさせられる内容となっていたので、この仕事の重要さや児童とのコミュニケーションの大切さを知ることができた。今回は、実際に子どもたちへの読み聞かせをしたことで、子どもたちの読書への関心と純心さを感じられたことは、知識だけではない体験として、児童という存在の大切さと、児童サービスの在り方の重要性を学習できたよい経験となった。子どもたちへの読み聞かせは、練習とは違う素直な反応があることは新鮮な嬉しさ楽しさがあった反面、練習よりも上手にできなかった感覚があり、もう一度挑戦したいと思わされた。
- (9) 自分以外の人の考えが分かる機会が多くて良かったと思います。座学とグループワークがバランス良く行われたので、途中でだれる事なく受けられました。読み聞かせも細かい所で指導があり、分かりやすかったです。台詞とナレーションの読み分けや、オノマトペの強調など、なかなか気付きにくい点にも気をつけながら練習できました。何より子ども達の「また聞きたい」という言葉が嬉しいです。
- (10) 絵本は子どもの想像力を豊かにするものであり、読み聞かせは本を通してのコミュニケーションであることがわかりました。読み聞かせの練習では、自分は声を出すのが苦手で、また、

読み聞かせの声の出し方も難しく、実際行って緊張もしましたが、練習より上手くいったと思います。読み聞かせを行う人はかなり苦勞されていると思いました。

受講者全員の感想を載せた。ここからわかることは多くある。まず、受講前と受講後とでは、子どもや読書についての認識が大きく変化していることである。「児童サービス」とは、ただたんに子どもの読書について学ぶということではなく、その主体である「子ども」への理解を深めることが重要であるが、学生は子どもからそれを学ぶことができている。この授業の最大のテーマである、「読み聞かせはコミュニケーション」というメッセージを、言葉という記号を通して知った後に、ひとつの経験知として体得したということである。座学で獲得した知識が、実践により深まった様子を確認することができた。大学の授業だけでは、「子ども」に接することは皆無であるが、この1時間に満たないひと時の経験は、学生に深い学びをもたらしたと言って良いだろう。学生達は、子どもと絵本、他者と自分自身と向き合うなかで対象世界を学んだ。表裏のないダイレクトな反応を見せ、学びを導く役割を担ってくれた子どもの力の素晴らしさを感じる経験だった。

学生による授業評価アンケートの結果（総平均値）は、4.6という数値だった。特に、「授業の内容に興味を持ち、より深く学びたいと思った」という箇所は、受講生10名中8名が5をつけた。授業を通して、子どもへの関わり方を考えるきっかけになったようである。ここでも学生を主体として教員がサポートするという形式は、学生たちが満足するものであったことがわかる。

但し、やはり課題は残されている。今回の結果を見ると、少人数で積極的な学生が多数を占めたこともありこのような結果となったが、年度によっては内気で思索型の学生が目立つこともある。後者の場合、「読み聞かせ」の実演は非常にハードルが高い。しかしながら、司書という仕事の本質は、やはりコミュニケーションであることを考えると、学生がそのハードルを越える手助けをどのように行うのかは担当者にとっての課題である。

## おわりに—地域連携授業のもたらすもの—

以上の実践における検討では、アクティブラーニングの手法で「深い学び」を生起させようとする際のひとつの方法として、実際の現場との関わりを設定した授業が効果的であることがわかった。加えてこのスタイルの授業は、学生個人の学びに止まらない広い効果を生み出した。

道徳の取り組みは2009（平成21）年度から、児童サービスの取り組みは2011（平成23）年度からというように、開始時期としては道徳が先である。道徳の場合、年数を重ねるうちに、筆者と中学校側のコミュニケーションが広がり担当者個人レベルの関わりを越えた実践となっていったこと、そのことによって、教員たちの声が筆者に伝わり現場で求められる教員像というものが学生たちのなかで具体的な像を結んだこと。また、現場からの数々の提案を受けて毎年授業の見直しができたこと。こうした協力はなにものにも代えがたい収穫であった。

児童サービスについては、連携先の変更により未だその域には達していないが、今後は園児だけではなく、教員との連携も進めていきたい。

教職課程や図書館情報学課程における学びでは、学生たちは理論を扱う部分に関して、現場との乖

離という意識を持ちやすい。しかしながら、実践上での行き詰まりが生じた時に、打開のきっかけを与えてくれるのはほかならぬ理論であり先人の知恵である。このことは、実践なしには実感できないことでもある。筆者は、理論と実践をつなぐ架け橋を連携授業に見ている。理論と実践とが対峙することにより葛藤が生じて「深い学び」が生じしやすくなる。この経験を通してそのことを再確認した。

確かに、一斉教授法に比してこの方法は、事前準備が煩雑で担当者、学生の双方に一定の負担を強いるものではあるのだが、その負担以上の効果が得られることは間違いない。特に、資格課程の授業では、現場を一部取り込んだ授業は、「百聞は一見にしかず」ということわざを彷彿とさせるような経験をするが多々ある。それは、授業では伝えることのできない社会文化的変数との遭遇を含む貴重な経験である。しかしながら、これを実現するためには幾つかの条件をクリアしなければならない。

第一に、連携先の確保である。これには、地理的条件が必須である。一番良いのは徒歩圏であることだが、大学の90分+休憩時間の枠内で移動を完了させなければならない。土曜日の活用などイレギュラーな方法の余地もあるが、これなどは、連携先との信頼関係の上で可能性が出るかも知れない。稚内の場合、中学校はすぐ隣、幼稚園は大学サテライト（まちラボ）から徒歩圏であったことがこうした取り組みを可能にした。

第二に、人数の問題である。稚内北星の資格課程は少人数であることが多いため、こうした方式が適していた。アクティブラーニング自体は大人数でも行うことができるのだが、現場における経験知を獲得しようとする場合、規模が大きくなるほど困難が増す。30名を越えてしまうとグループの数も多くなってしまったり、連携先での発表もままならない。少人数の場合でも、継続的な連携があった方が望ましい。場合によっては、個々の授業レベルでの連携を超えてそれぞれの教育課程レベルの調整も視野に入るとさまざまなアイデアが実現しやすくなる。

第三は、全ての科目に適用するとは限らないということである。前述した通り、現場につながる科目は大学では限られている。しかしながら、さまざまな観点から現場への結びつきというのは開発可能と考えられるので、例えば、学生が研究を通して身に付けた成果を市民に向けて発表する機会を大学で積極的に設けるなど、今後は必ずしも現場や職業に直結することのない一般科目のなかでの地域連携を考えるのも良いだろう。第三者の視線を引き寄せることは授業を活性化させる。

本論で検討した通り、地域連携授業は、たんなる授業ということではなく、大学を世代を超えた学習の拠点としていくための可能性を秘めている。

例えば、稚内は「子育て支援のまち」を掲げており、子どもへの関心が高い。このことを踏まえるならば、「児童サービス論」では、今後、幼稚園だけではなく、稚内市教育委員会、稚内市立図書館との連携を構築して、「読み聞かせ」以外の要素においても、ともに学生を育てる意識の共有を図りたい。教職課程においては、より切実な問題意識が存在する。稚内市は、他の自治体と同様、人口減少に歯止めのかからない状態が続いている。多くの理由があるなかで、医療の問題と教育の問題は特に深刻である。そうであるからこそ、後者の問題に関しては、稚内市の教育関係者が危機感を抱いており、地元の学生を育てて良い循環につなげようという理解が形成されている。

前述したように、こうしたきめ細やかな取り組みは、稚内市の文教地域に位置する大学の地理的条件と、子育てのまちを標榜してきた稚内市の指向性を背景とした好環境に負うところが多い。このほかにも同大学は、授業を通して地域の問題解決をしようとする取り組みを行っている。このことは、

地方にある比較的小規模な大学が大都市の大学との差別化を図ることのできる重要な観点である。そして、地域で人を育てるこの取り組みの効果は、たんなる授業連携から学校間連携への拡大を越えて、教育を介在させた新しいまちづくり（＝地域文化の創造）の担い手として大学が存在感を一層高めていく可能性を十分に秘めている。

#### ●参考文献

- (1) 1987（昭和62）年12月24日発表の教育課程審議会答申「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」により広まった。
- (2) この概念は、1983（昭和58）年11月15日に発表された、中央教育審議会教育内容等小委員会「審議経過報告」で初めて提示されたものである。「自己教育力」概念は、1965（昭和40）年の生涯学習理念を受けて1974（昭和49）年に社会教育審議会が建議した「在学青少年の社会教育」の中にある「学・社連携」の考え方に端を発している。生涯学習理念により、学校は、生涯における教育の終了機関ではなく、生涯にわたる学習の初期を担う機関という位置づけに変化した。
- (3) 現在、筆者は稚内北星学園大学の非常勤講師として「児童サービス論」を担当している。「道德教育の研究」は、本論文で扱った2013（平成25）年度以降は、別の担当者に引き継がれている。
- (4) 松下佳代「ディープ・アクティブラーニングへの誘い」『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、2015年、3-4頁。
- (5) 平間信雄「地域連携で創る『道德教育論』」『稚内北星学園大学紀要』No.10、2010年、63頁。
- (6) 池田裕子「実践力を育成する道德教育授業の展開 地域連携で創る『道德教育論』2」『稚内北星学園大学紀要』No.11、2011年；池田裕子・平間信雄「『道德教育論』の実践的課題～三年間のまとめと検討～」『稚内北星学園大学紀要』No.13、2013年。
- (7) Lave,J.Wenger,E./佐伯胖/訳『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書、1993年。本論での記述は、渡部信一/編『「学び」の認知科学事典』大修館、2011年、117-118頁による。
- (8) 但し、OJTは、上司と部下との関係で実施される訓練であるため、職場の多様な人々（同僚・部下・顧客）とのかかわりを通じた学習を見落としてしまう点が指摘されている（渡部、2011年、265頁）。
- (9) 香川秀太「『複数の文脈を横断する学習』への活動理論的アプローチ-学習転移論から文脈横断論への変移と差異」『心理学評論』Vol.51.No.4、心理学評論刊行会、2008年、464頁。
- (10) この取り組みの翌年である2014（平成26）年10月21日発表の中央教育審議会答申「道德に係る教育課程の改善等について」において、中学校の道德の時間を「特別の教科 道德」として、2019（平成31）年度から検定教科書を使用することが決まった。今後は検定教科書を深く読み込み、どのように活用して授業を行うのかを考えることが新たな課題となる。
- (11) 潮見が丘中学校との連携授業を重ねるようになってから、こうした提案をいただくようになっていた。前の年は、1年生3クラスで違う学生の自作教材による授業をさせていただいた。
- (12) 「読み聞かせ」の構造について検討した論文としては、張江洋直・池田裕子・安藤友晴「児童サービス論の現在の課題：「読み聞かせ」生成史と構造分析を中心に」『稚内北星学園大学紀要』No.13、2013年、がある。

#### ●英文タイトル

Community collaboration classroom practices and their efficacy: Active Learning as an educational method to improve the quality of teaching and learning

## ●英文要約

In recent years, “Active Learning” (AL), a teaching and learning approach that engages and involves students in the learning process, has gained importance as an alternative approach to the traditional method that relies mostly on the transmission of information to students who, in their turn, are often passive learners.

In the new Course of Study, AL will be positioned as one of the key terms and there is an increasing amount of papers on this topic.

However, as already pointed out in some papers, it is not only the use of AL that will guarantee the development of critical thinking skills.

Similar to the traditional teaching approach, the question on how to improve the “quality of learning” is still very important.

This paper, based on our experience at Wakkanai Hokusei Gakuen University, will examine the “community collaboration” approach, in special the collaboration among the schools as a way to incorporate AL practices into the classroom practices and improve the quality of teaching and learning.